月の夜に君と話そう

芙美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の夜に君と話そう

【Ｎコード】
Ｎ７８５５Ｒ

【作者名】
芙美

【あらすじ】
バイトをしてビールを飲むだけの毎日を送る秋人は、ある日しゃべる犬と出会う。

1　中途半端な月夜の出会い

コンビニバイトの帰りに、公園のベンチに座ってビールを飲むのが岡田秋人の習慣だった。

今日もビールを3本袋に入れて公園に来た。

人気のない夜の静かな公園に、ガサガサという袋の音、プシュッというビールを開ける音が響き、そしてすぐに静けさが戻った。

ビールを一口飲んで、秋人は空を見上げる。これも習慣のようなものだ。

空を見ながら、6月終りの少し湿った空気にぬるくなっていくビールを、一口一口流し込む。美味しくないような表情で、秋人はビールを飲み干した。

実際、美味しいから飲んでいるわけではなかった。ただ酒を飲まなければ、毎日をどう過ごせばいいのかわからないのだ。

今日の空は靄がかかったようにぼやけていて、その中を少し欠けた月が控えめに輝いている。

きれいだけど、中途半端だ。

ぼやけた月を見ながら明人は、満月が見たいと思った。つまらない気分を、満月なら少しは満たしてくれる気がしたのだ。

しかしもし満月だったとしても満たされることはなく、結局違う何かを望んだり探したりするだけだろう。秋人はそうやって物足りなさから抜け出そうとせず、少し欠けてぼやけた世界に閉じこもりなんとなく生きていくことを、自ら選んでここにいる。

色々なことが面倒で、全てを放棄し、ビールを消費する毎日。

そして今日も3本目のビールを流し込んだ。秋人は酒に弱く、3本のビールで酔うことができた。

中途半端だけど、やっぱりきれいだ。

秋人は月を見て同じことをぐるぐる考えた。それしか考えることもなかった。

まわらない頭で、そろそろ帰るかと立ち上がりかけたとき、声がした。
「ねえ、すみません。何か、食べる物を持っていないですか」
それは弱弱しく、幼い声だった。
秋人は据わった目で周りを見渡した。
左、右、上、右後ろ……。立ったまま見渡したが、それらしい人物が見当たらない。
「ん？」
よく見ると右隣に小さな影がある。少し驚いて近づいてみると、小さな犬が座ってこちらを見ていた。
小犬はぐったりと椅子に這いつくばっている。
小犬も気になるが先に声の主を探そう、と再びその場を離れようとした時、また声がした。
「あの」
声と同時に小犬の口が動いた。そして小犬の方から声がした。
犬が……しゃべっている？
秋人はそう考えながら頭をかいた。
「どうか僕に食べ物をわけてほしいのです」
犬が、食べ物を求めてる。
そうして秋人は、声の主が犬なのだと確信した。酔っていたのだ。非現実的な状況も、すんなり受け入れられる。
秋人は首をかしげて、犬を見た。
「お前、おなかすいてんのか」
「はい……」
もう力が入らないのだろう。犬の声はかすれていて、可哀そうで、なんとかしてやりたいと秋人は思った。
「よし、今はなんにもないから、うちで食わせてやる」
酔った口調で力強くそう言った。
力がはいらないのか犬の返事はなく、ただ黙って秋人を見ていた。
もしかしたら口にした礼の言葉も、かすれて声にならなかったのか

もしれない。
「おいで」
秋人はぐったりした子犬をそっと抱き上げ、千鳥足で家へと帰った。

2　しゃべる犬

酔いに任せて何も考えずに連れてきたが、秋人の家には食べるものがほとんどなかった。冷蔵庫にはビールだけで、冷蔵庫を探ると奥の方に霜にまぎれてラップに包まれた無骨な形のおにぎりが、ようやく出てきた。

「悪い、今はこれしかないんだ。ご飯は食べられるか？犬の食べる物はよくわからないんだけど、食べられるならどうぞ」

「食べられます……本当に申し訳ないです。ありがとうございます、この恩は一生忘れません」

ご飯を前にして、犬は心から感激したように礼の言葉を並べた。声はかすれていたが、言葉はちゃんと秋人に届いた。

「そんなの後でいいから、早く食べろよ」

気にするなというように秋人は犬の頭を軽くなで、小犬はつぶらな瞳で秋人を見て、それから一心不乱にご飯を食べだした。よほどおなかがすいていたらしい、すぐになくなりそうな勢いだ。

「ちょっと待っててな」

秋人は目をこすりながら立ち上がった。酔いはもうほとんど醒めていて、今は強い睡魔に襲われている。大きく欠伸をして、秋人は外に出て行った。

「ただいま」

１０分程して帰ってきた秋人の手には、コンビニの袋が握られていた。

「まだおなかすいてたらこれも食べな」

袋の中からドッグフードを取り出し皿にいれた。ご飯だけでは足りないだろうと、買いに行っていたのだ。

「ありがとうございます、本当にありがとうございます。この恩は一生わすれません」

「それ、さっき聞いた」

秋人は少し笑った。
一心不乱にご飯を食べる小犬を見て、秋人は今更この状況を不思議に感じた。酔いがさめてきたのだ。
「犬って、しゃべれたっけ。しゃべれなかったよなあ」
違和感なくしゃべる小犬に、ほろ酔いの秋人は少しだけ混乱していた。そういう犬もいるような気がしたのだ。
犬は顔をあげて答えた。顔にドッグフードが少し張り付いている。
「ふつう、犬はしゃべることができません。僕は月の出ている夜にだけしゃべれるみたいです」
「ふうん」
秋人は首をかしげながらうなずいた。
「なんで月夜にしゃべれるんだろう？」
「僕にもわかりません。気が付いたらそうなっていました」
好奇心に乏しい秋人はそこまで深く事情を聞く気もなく、わからないものを気にしてもしょうがないと、小犬のつぶらな目を見ていて思った。
「そっか、邪魔して悪かったな。おかわりが必要なら、言ってくれたらまだあるから。でも体に悪いからあんまり食べすぎるなよ」
愉快な気分だった。
久しぶりに気持ちの良い夜だ。
中途半端な月、ぬるいビール、しゃべる犬。それだけだ。深く考えることはない。今日は気分の良いまま寝てしまおう。
秋人は横になって窓から月を眺めた。窓には皿に顔をうずめている犬が見える。
犬と、会話をしてしまった。なんだか本当におかしな夜だな。
目を閉じるとすぐ睡魔に飲み込まれ、秋人は深い眠りについた。

3　同じような日々を

今まで秋人は何も考えていなかったし、何も考えたくなかった。それをこの日常は許してくれていた。

コンビニでのんびりと働き、帰りにビールを飲み、ぐっすり眠る。朝に太陽が昇り、太陽と月が交代をして夜になり、そしてまた朝がくる。

そんな風に同じような生活が延々繰り返されることを、秋人は望んでいた。

駄目なら駄目でいい、そんなやる気のない望みでではあったのだけど。

秋人は二年程コンビニで働いている。

給料は安いが貯金もあるし、家賃と酒と少しの食料くらいしかお金をつかうことがないから、特に不自由を感じることはないし、仕事も問題なくこなすことができる。不満は何一つなかった。

「おかさん、今日も公園でビールですか」

引き継ぎを済ませて休憩室に入ると、同じシフトにはいっていた下川が、美味しそうに煙草を吸っていた。秋人はここでおかさんと呼ばれている。

「もちろん」

そう答えると下川は「そうですか」と何がおかしいのかにこにこ笑う。

下川は秋人より少し年下の大学三年生。物腰が柔らかく落ち着いていて要領が良い、仕事のしやすい相手だ。

「今度の飲み会には来てくださいよ」

バイトの飲み会が時々開かれているが、秋人はその誘いをいつも断っていた。今日も「気が向いたら」と気のない返事をする秋人に、下川は屈託のない笑顔を返した。

「わかりました。じゃあ気が向いたら、お願いしますね」
その笑顔を見て一瞬弟を思い出し、はっとする。
今まで気づかなかったが、そういえば雰囲気が少し似ている。
弟とは、秋人が家を出てから一度も会っていない。

＊

「こんばんは……」
一本目のビールを半分飲んだ頃犬がやってきたが、声にも足取りに力がない。どうやら犬は少し弱っているようだ。
「なんだ、また食べ物見つけられなかったのか。頼りないなあ」
「はい。本当に」
弱っている犬は秋人の言葉にうなだれた。

初めに犬が秋人の家でご飯を食べた日、秋人と犬は話をした。
「お前、これからどうするんだ」
犬のことが何もわからず漠然とした質問になったが、犬はそれに対して真面目に答えた。
「食べ物の調達が出来る方法を考えます。それさえ出来ればあとはどうにかなるでしょう」
秋人は少し長く黙った。
「食べ物を手に入れるのって難しいのか」
「そうですね」
犬はこれまでのことを語った。
二カ月前、気が付いたら知恵がついて人間の言葉をしゃべられるようになっていた。その前のことは何も覚えていない。なんだかわからないままやることもなく歩き回る日々。食事は探してもうまくいかずに残飯や野草を時々口にするくらい。
ろくに食べることが出来ないまま力がはいらなくなり、弱っていた頃に秋人と出会った、ということだった。

秋人は話を聞きながら、何か考え込んでいるようだった。
「でも、僕ならきっと大丈夫。そのうち、食べ物を調達するコツがつかめると思うんです。だから大丈夫」
秋人を気にさせないようにという犬の気遣いだったが、それに対して秋人はふっと笑った。
それから少し考えてまた口を開いた。
「まあ、その様子だとすぐには無理と思うから、どうしてもつらくなったらご飯を食べに来いよ」
二カ月もろくに食べ物を探すことができなかった犬が、すぐに食べ物を調達するコツなどつかめるとは思えず、秋人は犬にひとつの提案をした。
「こういうのはどうだろ」
庭の壁の壊れた部分から出入りしてご飯を食べにくる、ドッグフードのはいったプラスチックの箱を庭に置いておくから、秋人がいない日は箱を開けて食べる。というものだった。
「でも、そんなお世話になるわけには」
犬は落ち着きをなくし意味もなくその場をばたばたと回転した。どうしたらいいかわからず慌ててしまっているようだ。
「たいした世話じゃないさ。俺がするのはドッグフードを開けることと、箱に入れること。それだけだ」
そう言って秋人は笑いながら、犬の頭をなでた。

4　太郎

それから2、3日に一度、弱った犬が申し訳なさそうに秋人を訪ねてくる。
犬は、秋人の生活を邪魔しているようで、本当に心苦しかった。
「僕にもお金がかせげたら」
お皿のドッグフードを前に、犬はつぶやいた。
「お前が稼げる方法なんてたくさんあるよ、なんたってしゃべれるんだから。でもな、お前、俺以外の人間の前で絶対にしゃべるなよ。最悪、悪いやつらに捕まって一生が台無しだ」
そう言って秋人はビールの残りを一気に飲んだ。少し顔が赤い。秋人が酔ってきた証拠だ。口調も少し乱暴になりつつある。
秋人はのろのろと立ち上がり、冷蔵庫からビールを取り出し戻ってきて、どかりと座った後、手にした新しい缶を開けて一口飲んだ。冷たいビールがのどを通る。
「ぷはあ、うまいなあ」
秋人は両手で犬のほっぺを挟んだ。秋人の息は酒臭かった。完全な酔っ払いだ。
「よお、わかってるか、お前。人間は怖いからな、まあ良い人もいるけど。でも大抵の人間はなんだかんだいって、危ういんだ。ちょっとした欲で自覚がないまま大事なものを簡単に裏切る、壊す。大事じゃなければなおさらだ。だからお前用心しろ、人前ではしゃべらない。これ、絶対だ」
珍しく酔った秋人が真面目な顔をしていた。
自分以外のものに対して干渉することを、秋人は好まなかった。誰かの行動を干渉したところで責任をとれないし、自分の考えに自信もない。人は人、自分は自分という考えで生きてきた。
しかし本当に秋人は犬のことを心配していたから、口を出さずにはいられなかった。

「わかったか、破ったらご飯なしだぞ」
そして秋人はまたいつものようにふざけて、犬の顔をはさんだまま手を揺すった。犬の顔がぷるぷる揺れる。それを見て秋人は笑う。酔ってる秋人を見慣れた犬は、その様子に「スイッチがはいったな」と思った。
「わかってるか、わかってるなら返事をしろー」
秋人はさっきより激しく手を揺すりながら、返事を強いた。笑っている。最近秋人は酒を飲むと笑い上戸になった。箸が転んでも女の子のように、他愛もないことでげらげらと笑い転げる。
「ふ、ふい。……う、うのう、ふれれまへん」
しゃべれません、と訴える犬を見て秋人はさらに笑った。それから手を離してにこにこ笑いながら頭をなでた。
困った人だなあ。
酔った秋人に犬はいつもそう思う。秋人は酔った時、よく犬を困らせることをわざとして楽しんでいた。
でも秋人が本当に嫌がることはしない人だと、犬にはわかっている。
犬は秋人を信頼しているのだ。
「なあ、お前に名前つけないと。何か希望はあるかい？」
突然だったので、犬は何も答えられなかった。犬からしたら突然だったが、秋人はそのことをずっと気にしていた。
「だってさ、お前、って言い方ちょっとえらそうだろ。俺そういうの嫌だからさあ」
「はあ、そうですか。僕は別に気にしませんよ」
お前という呼び方が偉そうかどうか、犬にそういう感覚はわからない。犬がそう言っても秋人は納得できない様子だ。考え込んでいる。
「俺考えてたんだけどさ。それでさ……太郎、でいいかな？」
秋人が名前を考え続けて、三週間で出した答えは「太郎」だった。普通の名前だが、秋人は考えるほどにそれがおかしな名前のよう

に思えて、変に悩んでしまっていた。理由もなく思いついて、違う名前にしようと考えても、最初に思いついた名前の印象が強く残り『太郎』以外に決められなかった。

秋人はこうやって、いつも何でも考えすぎてしまうのだ。

嫌がっていないかと、秋人は少し心配そうに犬の顔を覗き込んだ。

「はい、僕はもちろんそれでいいです」

その言葉に秋人の顔が明るくなった。ほっとしたようだ。

「良い名前です」

「そうか。そうかー、いやあよかったよかった」

機嫌よく犬の、太郎の頭をぽんぽん叩いて、三本目の缶を飲み干した。

よくわからない人だ。

でも太郎はそんな秋人に好感を持っていた。

意地悪を言っても、なんだかんだいって優しい人だ、きっと。

太郎は新しく名付けられたことが、心の底から嬉しかった。記憶も目的もなく空っぽだった部分に、光がさしたような暖かい気持ちになった。

僕に過去はないが、未来はある。太郎という名前で、僕はこれからを始めるのだ。

5　ある秋の夜

バイト帰り、秋人はビールのはいった袋を提げて、いつものようにゆっくりと歩いた。

もう長袖のシャツだけでは少し肌寒く感じる。秋が深まり涼しさから寒さへと変わっていくこの季節が、秋人は苦手だった。

空気も空も風景も明るい夏の色から秋の色に染まり行く、それだけなのにひどく感傷的になり、避けていた古い記憶がふとした瞬間に浮かんでくる。

そして、母が生きていた頃の家族を思い出す。もう戻れない日々……それがわかっているから、幸せな思い出は今の秋人には少しつらい。

秋人は、頑固で意固地で生真面目な父親が苦手だった。そんな父親から見た秋人も、何も考えず流されるように生きているように見えて、良く思われていなかったようだ。秋人と父親の相性は最悪だった。

二人の間に立つ母親がいなくなってから、秋人と父は顔を合わせれば、言葉を交わせば衝突していた。言葉が通じないのではないかと思うほど、分かり合うことができなかった。

そして、つまらないことで喧嘩して、秋人は家を出た。

最後に交わした会話はどんなものだっただろう。もう忘れてしまった。

高校まで育ててくれた実の父親だ。恩を感じているし、尊敬している部分もある。

嫌いな訳ではない……でももう会わないつもりでいる。

ああ、嫌になるなあ。

面倒を嫌う秋人は、心のざわめきにため息をついた。

二度と会うことはないかもしれないけれど、父も弟も幸せであるように。

そう願いながら月明かりの下、ぶらぶら帰った。

「通った感じどうかな」

ある日秋人は窓の横に太郎が通れる通用口を作った。

これから寒くなる。秋人の不在時に太郎が外で寒い思いをすることがないようにと、大家さんに頼み込んで、通用口のため壁に穴を開けることを了解してもらった。

この家の大家は近所に住む気の良い老夫婦で、若い秋人をよく気にかけてくれていた。

だから秋人が頼みに行った時も、夫婦で顔を見合わせて「どうしようかねえ」などと口にするものの、すぐに「まあ、好きにしてもらっていいんじゃないの」と返事をしてもらえた。アパートの作りは古く家賃は破格で、おそらく大家の生計をたてる目的のものではないのだろう。

お礼にといって、秋人は大家の家の立て付けが悪くなった箇所を、丁寧に修理してまわった。大家の住む家もまた古く、家のあちこちが傷んでいた。

「ありがとうねえ。あのアパートはどうせそのうち取り壊すんだから、好きにしたらええよ」

結局老夫婦には感謝されてお土産までもらい「また家を直しに来るから」と秋人は笑顔で帰っていった。

そしてペットドアを取り付けて、今は実際に太郎が通れるかを試しているところだ。

一度通ればそれで良かったのだがなんとなく楽しくて太郎は何度も行き来して、傍で秋人はにこにこしながらそれを見ていた。

「はい、問題なく通れます」

そうか、と秋人が太郎の頭を撫でた。

太郎は秋人と出会うまでの間、通りがかりの人間に頭をなでられることが何度もあったが、頭に手をかざされるのに少し恐怖を感じ

ていた。でも秋人は少し後ろから優しく頭を撫でるので、太郎は恐怖を感じない。どちらかというと、とても安心する。
「今日はお酒を飲んでいないんですね」
「ん。飲むよー、これから」
ぼんやりと秋人はつぶやいた。お酒を飲んでいない秋人は少し寂しげで、上の空だ。太郎の目にはそう見えた。
「お酒ってそんなにおいしいんですか」
「おいしいよ」
秋人はそう即答したが、少し間を置いて言い直した。
「いや、本音を言うとそんなにおいしくないかしれないな。オレンジジュースの方が、酒よりたぶんおいしい」
「じゃあ毎日お酒を飲まないで、オレンジジュースを飲んだらいいんじゃないんですか」
そういうと秋人はもっともだと笑った。
「まあ気分の問題だよ」
今度は太郎が首をかしげた。
「よく、わかりません」
「毎日を生きるのに必要なんだろうねえ」
少しふざけた口調で他人事のようにつぶやいて立ち上がり、冷蔵庫からビールを取って戻った。
「飲まない夜は長いし、静かすぎて過ごし難い」
そう言いながら缶を開けた。
「ということで、今日も飲もう。乾杯」
と言って太郎の顔に缶を軽く当てた。太郎は突然の刺激に驚いて転がった。それを見て秋人は笑う。
この人はお酒がはいると楽しそうだけど、そうでないと不安定なようだ。
太郎はだんだん秋人のことがわかってきて、同時に危うさを感じるようになった。
「秋人さん、顔を引っ張りすぎです」

「お前よく伸びるなあ」
「や、やめてくだはい」
もう。やっぱりこの人は、何にも考えてないのかもしれない。
太郎の顔をいじってゲラゲラ笑う秋人を見て、わからなくなった。
本当にいたずらが過ぎるけど、でも優しい人だ。これは、間違いがないだろう。
太郎は秋人の持つゆるやかであたたかい空気が好きだった。
たまたま出会ったのが、この人でよかった。
太郎は心からそう思っていた。

6　はるかさん

ある日いつものように秋人の家に行くと、先客がいた。
「はるかさん、どうも」
後姿だったが、横に結んだ長い髪を見れば、いやそれを見なくても、太郎にはここにいるのが誰かすぐにわかる。太郎が知る限りで、秋人の家を訪ねてくるのははるか一人しかいないからだ。
「太郎ちゃん、こんばんは」
はるかはにっこり微笑んだ。
同時に秋人はほっとしたように太郎を見る。
この人はまた、と太郎は秋人の表情を見て言いたくなるが、はるかの手前我慢する。
「あ、僕もうちょっと散歩してきます」
はるかの気持ちを考えて出ていこうとする太郎を、秋人は必死に引き留めた。
「何言ってんだよ、こっちにこいよ。みんなで遊ぼうぜ」
口調は軽いが、強引だった。こんな焦り気味で余裕のない秋人はめったに見られない。はるかさんが可哀そうだと太郎はため息を吐いた。
「いや、僕今日はやめときます」
それでは、とドアから出ようとする太郎を、秋人がひょいと持ち上げる。
「ちょっと、離してくださいよ」
「あははっ」
太郎は手足をばたつかせる。秋人はそれを見ていつものように笑った。
秋人が手を離したのは太郎を部屋の中央に降ろしてからで、秋人は太郎が出ていくのを阻むように、出入り口の傍に腰を下ろす。どうしたって出ていかせてくれそうにはないと、太郎は諦めることに

した。
「全くもう」
笑っている秋人に太郎は呆れてしまう。
「太郎ちゃん、一緒にお話ししましょう」
あからさまな秋人の態度に気づかなかったのか気にしていないのか、はるかは楽しそうに笑っていた。
はるかさんがそう言うならしょうがないと、太郎はその場に座り込んだ。
しかしどうにも居心地が悪い。二人が太郎を見ている。気まずいような楽しいような、妙な空気だ。
「よし、飲むか」
秋人はそういって勢いよく立ち上がり、二本ビールを出してきた。
はるかも一緒にビールを飲む。秋人もはるかもしゃべらない。口数の少なさを誤魔化すように、ビールをちびちび飲む。目が宙をさまよったりする。二人同時に何か言おうとして、言葉がかぶりすぐに黙り込む。
そんな風にして数分が経った。
いつもこうなんだ。
心の中でため息をついて、太郎はしゃべりだした。しゃべらずにはいられない雰囲気があった。
「秋人さんまた無茶な飲み方して、寝ないで下さいよ。はるかさんが来てるんだから。はるかさん、秋人さんね、飲むだけ飲んで、気がついたらいつもおなか出して寝てるんですよ。」
太郎はそう言ってはるかの方を向いた。
いらないことを言うなよと秋人は太郎の頭にぽんと手をやる。
「夏の暑い時期ならいいけど、今みたいに寒いと体に悪いから、気をつけてくださいね」
ぶつぶつ言う太郎に、秋人は缶をくわえてふふふと笑う。はるかも一緒に笑っている。
太郎は二人の笑顔にほっとした。少し空気も軽くなったようだ。

「心配してるんですよ、僕は。はるかさん、僕布団を下ろせるようになったんですよ。ええっと、こつはですね、このテーブルから押入れの上の段に飛び乗って、布団を口にくわえて体重をかけて下ろすんです。そうすると布団は落ちるんですけど、口にくわえた僕も落ちるんですよ。この前はそれであわや大惨事で」
太郎は夢中でしゃべった。少しいつもより言葉を多めに使い、精一杯にしゃべった。
「太郎ちゃん器用だね。えらいえらい」
「いやあ」
はるかは太郎の頭を優しくなでたので、太郎は少し照れてしまう。
「えらくない」
それを見て秋人は太郎を持ち上げ横に移動させた。少しすねたようだ。
「俺体なんか壊さないもん」
そっぽを向いて子供のように言い放った。
唇を突き出したまま、ビールを飲む。飲みにくそうだ。
そんな秋人に太郎はまた呆れる。
「何言ってるんですか。ろくにご飯も食べないでビールばっかり飲んでるくせに」
「そうなの？ちゃんと食べたほうがいいよ」
「いや食べてないわけではないというか、ちゃんとでないことはないというか」
何やらぶつぶつと秋人は缶をくわえたまま言っているが、何を言っているのかよくわからない。
しゃべり終えたのか、ビールをゆっくり飲み干して、一息ついた。
「まああれだな、もう一杯飲もうか」
秋人が仕切りなおすようにそう言って冷蔵庫に移動した。
「あれ、どうやらお酒がなくなってしまったようだ」
太郎はちょっと嫌な予感がした。経験に基づく、当たる確率の高い予感だった。

「買いに行ってくるから後はよろしく」
秋人は太郎とはるかににっこりと笑いかけて、財布をつかみ声をかける暇もなく外へ出ていった。
ばたんとドアは閉まって、太郎とはるかは部屋に取り残された。
「行っちゃったね」
「行っちゃいましたね」
太郎とはるかは顔を見合わせた。

7　コースター

秋人が家を出てから三十分たった。
「秋人くん帰って来ないね」
酒を置いているコンビニはアパートを出てすぐの場所にある。いつもなら十分もしないで帰ってくるのに、秋人は帰って来ない。
予想通りだ、今日も秋人さんは逃げてしまった。このまま待っても時間を無駄に消費するだけだろう。
太郎ははるかの気持ちを想い、胸を痛めた。
「そろそろ帰ろうかな」
ちびちびと飲んでいたビールを飲み干し、はるかは缶を片付けて立ち上がった。
「すみません」
太郎が謝ることではないのだが、はるかの気持ちを考えるとそう口にせずにはいられない。
「大丈夫、二人の元気な顔が見れたから、もういいの」
はるかは笑った。いつものように穏やかな表情だが、心なしか翳りが見える。太郎はそんなはるかにかける言葉がみつからず、立ち尽くした。
「私、やっぱり嫌がられてるのかな。もう、あんまり来ない方がいいかもしれないね」
去り際にはるかは独り言のようにつぶやいたが、背中を向いていたのでどんな顔をしているか、太郎にはわからなかった。

太郎は腹を立てていた。もちろん、秋人のはるかへの態度についてだ。
秋人ははるかに対してはいつも不誠実で、誤解されるような行動ばかり取っていた。
太郎が来てからはるかは何度も秋人を訪ねてきたが、いつもこん

な風に秋人は逃げ出すように外へ出て、そのまま何時間も帰ってこない。
太郎が来る前は、はるかは秋人の家に来ても１０分もたたないうちに帰っていたようだ。
「秋人くんはあんまり話す気がないみたいで、何を言っても生返事ばっかりなの。二人でいる間の５分は息苦しくて妙に長く感じるよ」
はるかはふざけたように、しかめ面を作ってみせた。
「それでも顔が見たくなってつい来ちゃうんだよねえ」
少し黙りこんだ後、ぽつりとつぶやいた。太郎に話しているというより、独り言のようだった。
「でも太郎くんのおかげで一緒の時間が少し伸びたし楽しくなった、ありがとう」
と、はるかは朗らかに笑った。
恐らく昔から秋人ははるかに対してそっけなく接していたのだろう。はるかが嫌がられていると考えるのも無理はない。
しかし、太郎はそう思えなかった。

ある日のこと、いつものように秋人は酔いつぶれていた。
「だからな、だからな……あれ、何を言おうとしたんだっけなあ」
ぽりぽりと頭をかいてぼんやりとしている秋人の横で、太郎はボールと戯れていた。酔った秋人は同じ言葉を何度も口にして話が前に進まず、わけがわからなくなってそのうち横になって寝てしまう。
「なんだったかなあ。……いてっ！」
いつものようにぶつぶつ言いながら横になろうとして、棚に頭をぶつけたらしい。棚に置いていた物が落ちて床に散らばった。そしてその上動揺して机に置いてあった醤油をこぼしてしまった。
「うわっやべ」
それを見て秋人はひどく慌てた。床に散乱したものを乱暴につかみ台所に行く。酔っているとは思えない素早さだった。
蛇口をひねり何かを洗っている。醤油がついたのだろう。

絨毯に着いた醤油は太郎が、ティッシュと机の上にあった布巾をくわえて床に落とし、足で踏を使って丁寧にとりのぞいた。少しだけシミになったが、そんなことは秋人も気にしないだろう。
秋人は水で洗い流した物を、窓際の洗濯ばさみに挟んだ。それで安心したらしく、大きく息を吐いて再び横になって、そのまま寝てしまった。
何にそんなに慌てたんだろう。
太郎は不思議に思い顔を上げて洗濯されたものを見て、納得した。干されているのは深い藍色のコースターだった。それは秋人がたまに、言葉少なにゆっくり飲む時に使うような、物想う静かな夜に秋人の傍にある物だった。

次の日、はるかが遊びに来て干されているコースターを目にすると、嬉しそうに手に取った。
「使ってくれてたんだ」
「あ。ああ」
はるかは顔を綻ばせて、秋人はしまったと渋い顔をした。
コースターについての二人の会話はそこで終わり、後は秋人が外に出て帰ってこない、いつものパターンが繰り返された。
秋人がいなくなって、コースターが話題になった。
「あのコースター、はるかさんが秋人さんにあげたものなんですか」
「そう。あれはね、私が作ったものなの。秋人さん缶ビールをよく飲むみたいだから、机汚れちゃうかなって」
はるかは雑貨を作っている作家だが、それだけで生計をたてるのは難しいから、アルバイトもしていると聞いている。
「へえ、そうだったんですね。秋人さん、ちょくちょく使ってますよ。昨日はコースターにちょっと汚れがついて、すごい慌てようでした。他の物にはそんなこと無頓着なのに。大事にしているみたいです」
太郎の話を聞いてはるかは少し顔を赤くして、初めて見る、とろ

けそうな笑顔で笑った。
「そうなんだ」
はにかみながら、はるかは太郎の頭をなでて、それから太郎を持ち上げた。じっとしていられないようだった。
「嬉しい！」
はるかは太郎を持ち上げたままその場をくるりと回った。

8　大切な

秋人がコースターを大切にしているのは、はるかを大切に思う気持ちの表れだと太郎は考えている。
あの二人、もっと仲良くなればいいのに。それは秋人さん次第なんだろうけど、秋人さんはなんではるかさんから逃げるんだ。
太郎があれこれ考えをめぐらせていると、秋人が帰ってきた。
はるかが帰ってから二時間経過している。
「ただいま」
出て行った時より、酒臭い。
「はるかさん放っておいて、何飲んできてるんですか。お客さんが家にいたら、まっすぐ帰って来ないとだめですよ」
太郎は秋人に食って掛かった。
「いやあ」
太郎を見て秋人は曖昧に笑った。
「だいたい、秋人さんはちょっとはるかさんに冷たすぎるんじゃないですか。可哀そうですよ」
太郎がいつになく真剣に怒っている。なんとか誤魔化せないかと酔いで回らなくなった頭で考える。
秋人自身、自分のはるかへの態度を良しとしていなかったので太郎の怒る気持ちもよくわかるのだが、秋人は向き合うことよりも逃げ出す方を選んだ。いつものように。
「秋人さんはいつも物事をややこしく考えすぎなんですよ」
この言葉は秋人の胸に突き刺さるものがあった。太郎に対していつもふざけているばかりで、真面目な話はほとんどしたことがないのに、秋人のダメな一面を太郎に見抜かれていた。
秋人は太郎から目を逸らし、押入れから何かを取り出した。
「太郎、ごめん」
「悪いと思っているなら、はるかさんに態度で示してくださいよ…

…ってこれなんですか。お、おかしな感触」
秋人は太郎の前にボールのようなものを差し出した。いつも太郎が遊んでいる野球のボールより少し大きめで、とても柔らかく弾力性のあるボールだった。
ボールに乗ってみると体が沈み込み、ぽよんと弾かれる。転がしてみると軽快に動き追いかけるのが楽しく、大きさがちょうどくわえられるくらいなのでつい口にしてしまう。
太郎は気が付くとボールに夢中になっていた。
「はあ、楽しかった」
はっと気が付いて振り返ると、秋人が横になって寝ていた。
「いけない、誤魔化されてしまった」
話しの続きは明日することにして、太郎は布団を押入れからひっぱりだして秋人にかけた。

次の日秋人は留守だった。
「秋人さんらしい」
庭に植えてあるバラの木と、太郎は話をすることができた。太郎が何とでも会話できるわけではなく、バラの木は特別だった。このバラの木は寿命が過ぎても長い間生き続けているらしい。人には聞こえないような言葉で、太郎に語りかける。
「なんでだろう。僕にはわからないなあ。大切なものを、大事にしないなんて」
太郎の言葉に、バラの木は少し沈黙した。風で枝葉が揺れる。静かで心地の良い夜だった。
「秋人さんは怖いのではないかしら」
バラの木は秋人が引っ越してきてからずっと、秋人のことを見てきた。だからそれなりに秋人を理解している。
「人を信じられないし、自分を信じられない。大事にして、相手に突き放されることも、自分が嫌になって相手を突き放して傷つける

ことも、きっと秋人さんは怖いのね」
「でも今だって十分はるかさんを傷つけてる」

9　シロ

「意気地がないのよ」
「シロちゃん」
　バラの木の蔭から、一匹の小さな猫が出てきた。この猫もまた寿命以上に生きて、力を蓄えた猫だった。その力はバラの木より遥かに強く、太郎のように人間の言葉を話すこともできるし、それ以上の能力も身に付けているようだ。
「傷つけること以上に関係が壊れるのが嫌で、もし終わるならきれいな思い出のままがいいけど、その終わらせる覚悟もなくて動けずにいる。何も考えず、ぬるま湯の中にいたいよ。ほんと、馬鹿」
　シロは腹立たしげに、語気を荒げた。
「そうなのかなあ。でもそりゃ、そういうのは嫌なんじゃないのかな。僕だってつらい思いは避けたいと思うもの」
「馬鹿。太郎も馬鹿ね」
「む、なんだと」
　太郎はシロの言葉に少しだけ怒った。
「傷つけなきゃいい、壊さなきゃいいんでしょう。あの人は自信がなくて、つらい思いをしたくないから、幸せになる権利も放棄して逃げているのよ。幸せになろうと思えばなれるし、逃げきろうと思えば逃げ切れるのに、どっちつかずで。よっぽど……よっぽど、あの人のことが手放し難いのね。だから曖昧に済ませているの。馬鹿みたい」
　どうも、腹をたてているようだが、太郎にはその理由がわからない。
　しょっちゅうシロは気ままに秋人の家を訪ねてくる。
　もし秋人がいれば、シロはのどを鳴らして目一杯甘える。その様子は誰がみても、なついているようにしか見えない。
　でも秋人がいない時はいつもこんな調子なのだ。何故か腹を立て

ている。
「ふうん。よくわかってるね。でも僕には理解できないなあ。好きなら楽しいから一緒にいたいし、嫌いなら不愉快だから会わない。それでいいんじゃないの。どうして気持ちと違うことをしてしまうんだろう」
太郎の言葉に、バラの木は笑うようにさわさわと葉を揺らした。
「可笑しいかな」
首を傾げた。太郎には自分の考えに間違いがあるなんて思えない。
「単純ね」
シロがからかうように言った。
「ごめんなさい、バカにしたわけではないの」
バラの木は慌てて謝った。
それでもまだ、嬉しげに揺れている。
「きっと、太郎さんの単純さが、いつか秋人さんを救うでしょうね」
「え、そうかなあ」
バラの木は、優しくそう言って、太郎は素直に喜んだ。
「だめよ！」
しかしシロがそれに口をはさむ。
「救わせない。誰にもあの人を救わせないわ」
シロは強い口調できっぱりとそう言った。その様子に太郎は言いようのない不安を感じる。
「それはどういう……」
太郎が言葉の意味をたずねようとしたが、シロは聞こえない様子で、軽やかに塀の上の飛び乗った。
「それじゃあ私はもう行くわ」
言い終ると同時にシロは塀を飛び降りて、どこかに消えた。

10　誰か

今日のシフトは朝から夕方まで下川、夕方から夜まで秋人、そして店長が朝から夜の通しではいっていた。

この店は立地条件が悪いせいか売り上げが振るわず、経費削減のためにバイトを減らして店長が長めに働いているが、休みが被って代わりを探すのが難しいこともある。特に朝や昼は、学校があり学生をあてにしづらい為、代わるのはたいていの場合はフリーターの秋人なのだが、今回は休んだ人間の代わりに下川が朝のシフトにはいった。

「その日は休講が重なってるから大丈夫ですよ」

などと言う下川に、勉強を嫌ってバイトに逃げたのではないかという秋人の追及に「どうですかねえ」と下川はふざけてみせた。

「ほいじゃ、おかさん店長、あとはよろしくお願いします。おつかれさまでした！」

仕事を秋人に引き継いだあと、笑顔を残し下川は去って行った。

客のいない店内に、音楽が流れる。賑やかな人間がいなくなると、音楽があっても静かに感じる。

「下川君はほんとに大丈夫かね。成績は落ちたりしないだろうか。ちょっと心配だなあ」

誰もいない自動ドアを見つめながら、店長はつぶやいた。

「心配することないでしょう、あいつはなんだかんだいって、ちゃんとやる人間ですよ」

仕事のこなし方を見ていればわかる。下川は要領が良いだけではなく、真面目で手を抜かない人間なのだ。普段ふざけてはいるが、状況を見て切り替えが出来る賢さもある。

「そうだね、そうだよね。下川君を信じよう。それじゃあ僕はお客さんが少ないうちにジュースの補充に行ってくるから、何かあったらすぐ呼んでね」

店長が補充に行った後もなかなか客が来なかったので、秋人はレジ周りの掃除を始めた。
その様子を真っ白で小さな猫がドアの外からのぞいていた。猫はしばらくそこにいたが、つい、と踵を返して走り出した。

下川はポケットに手を入れてリュックをがちゃがちゃ揺らし、歩きながら機嫌よく歌っていた。
『下川』
下川は公園の前で誰かに呼び止められた。
誰かがいる。
下川は突然の出来事に頭がついていけず、もやがかかったように記憶が曖昧になる。
『下川』
誰だろう。俺の名前を呼んでいる。
何故だか近くにいるのに顔が良く見えず、下川にはそれが誰だかわからなかった。
「誰？」
下川は正直に問いかける。
『俺だよ。お前の友達。わかんないのかよ、ひどいなあ』
声の主は下川をじっと見つめた。
顔は良く見えないのに、目だけははっきりと見える。
下川は声の主と目を合わせると、ようやく目が覚めたように、記憶が浮かんできた。
そうだ、こいつ、俺の友達だよ。
下川は声の主が自分の友達であることを、理解した。
「あ、ああ。ごめん、ぼんやりしてたわ。悪い」
『いいよ。そんなことより、お前ムンレクていう店知ってるか？』
「いや、知らない」
『隣の町にある雑貨屋だ。そこにお前の好きそうなかわいい子がい

るから、食事に誘うといい。いきなり誘うと怪しまれるかもしれないから、お前が働いているコンビニの名前と場所でも教えるんだ』
友達は下川の目をじっと見ながら、いたずらっ子のように、くすくすと笑っている。下川の目はうつろであった。
ムンレク……食事……コンビニ……。ムンレク、食事、コンビニ、ムンレク……。下川は心の中で反芻した。
『それじゃあまたな。がんばれよ』
「お……おう。またな……」
友達はすぐに下川の前から姿を消したが、その後もしばらく下川は公園の前にしばらく立ち尽くしていた。

11　ムンレク

ぼんやりとした表情で下川は歩き、『ムンレク』という看板のかかった店にはいった。
「いらっしゃいませ」
下川は店員の声ではっとして我に返った。
そうだ、ムンレク。俺はここに来ようと思っていたんだ。……それと、なんだったっけ。何かあった気がするが思い出せない。
商品を見ながら中にはいっていく。あたたかみのある手作り風の雑貨が置いてある、こじんまりとした店だ。
何気なく顔をあげると、レジで作業している店員の顔が目にはいった。優しい雰囲気の可愛らしい女性だった。
思わず下川は店員に見とれてしまう。
下川は近くにあるコップを手に取って、レジに向かった。
「ありがとうございます」
店員は顔をあげて、笑顔を見せた。
やわらかいその笑顔に、下川の心は強く揺さぶられた。
「ご自宅用ですか？」
「はい」
応えながら顔を逸らして、顔が赤くなるのを隠した。
店員は箱を取りだしコップを丁寧に梱包する。
「あの」
下川は思わず少し大きな声をだしてしまった。緊張しているようだ。店員は顔をあげて、笑顔で応える。
「俺、下川っていいます」
突然の自己紹介に、きょとんとした顔をした店員に、下川は焦ってしまう。
「いや、怪しい者ではなくて、なんていうか」
頭をかきながら、柄にもなくナンパのようなことをしている自分

を恥じて、どうしようどうしようと考えた。
「あ、そうだ。俺、築町三丁目のコンビニで働いてるんです」
店員は驚いたような顔で下川を見た。
「そこで、岡田秋人っていう人が働いてないですか」
今度は下川が驚く番だ。下川にとって謎の人物である秋人の名前が出て、不安がよぎる。
「います。あのもしかして……おかさんの彼女さん、ですか？」
恐る恐る聞いてみる。店員に声をかけるという慣れない行為に、緊張してなんの配慮もできずうまく立ち回れない。
「いえ違います、ただの友達です」
慌てて否定する店員の言葉に下川は安心して、店員の顔がほんのりと赤くなっていることに気づかなかった。
共通の知り合いがいるということで、お互い少しリラックスする。
「秋人くんて、どんな風に働いているんですか」
今度は店員から話を聞いてきた。よし一歩前進、などと下川は思ったが、ざっくりした質問になんと答えようかと少し迷う。
「おかさん、あ、岡田さんのことなんですけど。どの時間帯でもちゃんとやることやって、しっかりしてるからみんなに頼りにされてますよ」
「へえ、そうなんだ」
店員は話をきいてはにかんだ。嬉しそうにしている。下川はまだ話を続けようとしたが、店員の名前をきいていないことに気が付いて、話を変えた。
「あの、良かったら名前を教えてもらえないですか。さっきも言いましたが、俺は下川です。下川亮」
「私は、渡辺はるかです」
快く答えてもらって、とりあえず下川は安心した。これなら、もしかしていけるだろうか。
「渡辺さん、仕事が終わったらちょっとコーヒーでも飲みに行きませんか。近くにおいしいお店があるんです。いや、あの、おかさん。

そう、おかさんって飲み会に誘っても来ないし、自分のことも話さないしよくわからないんですけど。まあそんなおかさんを肴にコーヒーでもどうですか。いや、僕この後ひまでしょうがなくて。良かったらで、いいんですけど」
下川は焦りを隠しながら、初対面の人間に声をかけることを恥じながら、はるかともっと話をしたいという一心で誘った。
はるかは下川の下心に全く気付かず、秋人の知り合いという安心と、秋人の話を聞きたいというはるかの下心が手伝って、誘いを受けることにした。はるかは秋人のことでいっぱいで、他が目にはいらないのだ。
「今日なら仕事の後予定がないので大丈夫ですよ。あと三十分くらいで仕事は終わります」
「ほんとに、やった」
下川は正直に喜びを口に出した。
「それじゃあ、終わったらここに連絡ください」
携帯のメモをはるかに渡して、下川は店を出た。

下川は浮かれながら、軽い足取りで歩いた。気を緩めるとスキップしてしまいそうだ。
やっぱり店の名前をだしてよかった。あいつの言ったとおりだったな。あいつの……あいつ？あいつって、誰だっけ？
下川の頭に一瞬公園と、そこにいる誰かの影が浮かんだが、すぐに消えてしまった。
あれ……？
立ち止まり、ぼんやりした頭を正すように、軽くこぶしで頭を叩いた。
俺、今何か考えてたけど、なんだったかな。
下川の頭にかかっていた靄がとれてすっきりする頃には、公園の前にいた誰かの影は記憶から消えていた。

１２　待ち合わせ

下川ははるかの仕事が終わるまで、近くのコーヒーショップでタバコを吸いながら待った。
待ちながら、はるかのことを考える。
下を向いて作業をする姿、レジでの笑顔、言葉を交わした時の声やしぐさ。
かわいい人だと思うが、それ以上に魅かれる何かがあった。
ひとめ惚れだろうか。……いや、もっと確実な気持ちだ。自分にはこの人なのだ、というような。
会ったばかりなのにおかしいな。
煙を吐きだし、携帯電話を手に取る。あれからもう３０分たっている。その間下川は携帯電話を何度も確認しているのだが、一向に連絡がこない。繰り返し携帯電話を見て、足を組み換え、外を見てと、下川はそわそわして落ち着かない。
また携帯電話を確認しようと手に取った時、電話が鳴った。ちゃんと気づくように念を入れて音量を最大にしていたので、音の大きさに驚き一度携帯電話を落としてしまった。焦って拾い、電話に出た。
「は、はい」
『もしもし、ムンレクの渡辺です。先ほどはどうも。仕事が少し遅れてごめんなさい。えっと、どこに行けばいいですか』
「それじゃあ、店のすぐ近くにいるので、迎えに行きます」
下川は電話を切って大きなため息を吐いた。
電話がかかってきてよかった。
緊張して声がかたくなっているのが自分でもわかった。感じの悪い男だと思われなかっただろうか。
「よしっ」
しかしなんにしても、この後の食事が楽しみでしょうがない。下

川はコーヒーショップを出た後、出入り口で気合を入れて店に向かった。

二人は食事も酒も楽しめる、こじんまりとしたカフェにはいった。
「ここの料理、すごくおいしい」
美味い料理に気持ちがほぐれて、二人の会話ははずんだ。
会って数時間ほどなのに、前からの知り合いのように、お互いについてすんなり理解することができた。口にはださなかったが、それは二人とも共通して感じていることだった。
「雑貨を作って、ネットやイベントに出たりしてるんだけど、それだけじゃ生活できないからバイトしてるんです」
話を聞いてみると、はるかは雑貨を作ることに費やし、遊ぶ時間もないような生活を送っている。
「大変だろうけど、正直うらやましいなあ。俺はもう内定もらって仕事が決まってるんだけど、ちっちゃい会社の営業だもん。就職先が見つかったのは嬉しいけど、作り上げる実感とか達成感とかそういうのって、きっと味わえないと思う。つまんない仕事だよなあ」
少し酒がはいって、下川はつい愚痴をこぼしてしまう。仕事が決まったのが嬉しい反面、自分の人生がもう決まってしまったということに対する不満や不安が、下川の中にはあった。
「そんなことないですよ。私が使っている布もパーツも、デザインした人や形にする人以外にも、それを広めるために頑張っている人がたくさんいて、それは配送の人だったり販売の人だったり営業の人だったり。見えないだけで、いろんな人がかかわった結果手に入った物がたくさんあるんだって、そのおかげで作品が出来たんだって、私は感謝してるんです。下川さんの仕事も、きっとみんなに必要とされている遣り甲斐のやる仕事じゃないかな」
下川ははるかの言葉に、何も返すことができなかった。
「あっ。ごめんなさい、いきなり熱くなっちゃって。これ、うちの

父の受け売りなんです。物を作るなら、そういう人たちに感謝しろって。ご飯を食べる時に、農家の人に感謝するみたいに」
はるかは勢いで何も考えず述べた意見を、話し終えた今ようやく冷静になって思い返し、軽い自己嫌悪に陥った。
それが下川の目にわかるほど、はるかは肩を落としてしゅんとしている。
「いや、ありがとう。俺、ちょっとやる気でた」
下川は簡単に応えたが、はるかの真っ直ぐな意見は、少し悲観的になっていた下川の道筋を少し明るくした。それとともに、最初に感じた『自分にはこの人だ』という気持ちが、より強くなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7855r/

月の夜に君と話そう

2011年9月26日01時03分発行